

第133回くらしの植物苑観察会 2010年4月24日(土)

江戸の花 桜草

鳥居 恒夫(植物・園芸研究家、さくらそう会世話人代表)

サクラソウ(桜草)という植物

学名は、*Primula sieboldii* E. Morren

多年草、日本産サクラソウ属(*Primula*)14種の中の代表種

分布は北海道～九州で、四国と沖縄にはなく、朝鮮半島、中国東北部、沿海州まである
自生地は高原や冷涼な地方で、草原の湿性に群落を作って生える。

寒さに強く、暑さと乾燥には弱い。しかし、プリムラの中では最も暑さに耐える。

春に根茎から葉を広げ、花茎を立てて開花、夏には葉が枯れて休眠する。

突生苗は秋まで葉を茂らせる。

世界のプリムラは400～500種、ほとんどは北半球の温・寒帯・高山に分布

日本桜草と呼ぶのは不適切

和名はサクラソウ(桜草)、江戸以来明治時代までは、桜草と呼んでいた。

日本だけでなく大陸にも同じ種が自生する。中国名は翠南報春、韓国名はエンチョウ

欧米ではシバルス・プリムラズ、ジャパニーズ・プリムラズといえ、*P. japonica*で

あるクリンソウや*P. nipponica*のヒナザクラを指すことになってしまう。

桜草が記録に登場するのは江戸時代の直前から

京都を中心の畿内には自生地がなかったと考えられる。中世の詩歌や絵画には登場せず。

江戸近郊の荒川の原野には大群生地があった

上流の高原地帯から株や種子が流ついでできた二次的な自生地とされる。

江戸という大消費都市が生まれたことがその要因ではないか

荒川の河川改修、寛永8年(1629)三代家光の時代

原野の利用のため毎年野焼きが行われた。大量の肥料の需要が起こった。

更地となった原野にはよく日光が当たり、流れ着いた桜草がよく生育した。

洪水によって肥沃な土が程良く根茎の上に積もり、繁殖を促した。

広大で肥沃な原野では、多くの多様な株が生まれた。

泥土が積もって高くなると、大洪水で突き崩されて低地に戻り、再生した。

園芸草花としての発展

江戸初期の庭園には中国産の花木や草花、日本の植物が植えられた。桜草もあった。

群生地から特に目立つ株(花形、花色など)を採取して、栽培した。

この株から種子を採って播き、より美しい個体を選抜、これを繰り返した。

連という同好会を作って品評し、質の高い優良花が選出され、残された。

将軍が鷹狩りの折りに桜草を愛でたことから、家来の武家の間に栽培が広まった。

人々が桜草を愛玩し始めたのは享保(1784～1803)の頃からという。

植木鉢はまだ普及しておらず、雑器の鉢(孫半土鉢と呼ぶ)に底穴を明けて使った。

美しく觀賞するために組立式の「桜草花壇」を創案した。(天保年間)

品種名は、謡などの中から雅な章詞を取って命名。原典は和歌(古今集、新古今集等)

桜草は江戸の花

江戸という大都市ができたことで、大群生地が生まれた。

江戸の地に自生した植物を江戸の人が園芸草花に作り上げたのは桜草だけである。

江戸の街では自生地から掘り取られた桜草が売り歩かれた。浮世絵や川柳にも残る。
江戸の町では桜草がもてはやされ、人気絶頂の富本豊前太夫が桜草の紋をつけた。
群生地の衰退消滅も、江戸の街の発展と度重なる災害による。

明治以後の桜草園芸

江戸幕府の崩壊で、桜草の愛培家であった御家人たちが没落した。
欧米からの目新しい草花に人気に移り、桜草は忘れられた。
しかし少数ながら熱愛家が栽培し、多くの新品種が出現した。
関東大震災と戦争により壊滅状態となる。

桜草の復活

愛培家たちは多くの品種を苦勞して持ちこたえた。
桜草を広く普及するために、新時代にあった運営の「さくらそう会」が設立される。
会員への配布苗によって、全国各地に普及

混乱していた園芸品種の整理・統一

長い栽培の歴史の中で、取り違えや間違いが生まれた。
江戸時代の愛培グループは三つはあり、門外不出を守ったので異名が生まれた。
明治維新、大震災、戦災で混乱した。
販売者が別名を付けて販売した。
全てのを栽培して比較・同定し、記録や伝承を参考に、1品種に1つの名称。
古くから残された品種を正確に伝えるために、「さくらそう会認定品種」を選定した。
新品種は現代に適うものを選定

2006年現在、297品種を認定、図譜を刊行した。2010年現在310品種 品種同定のキーポイント

花柱形に注目、花形、花冠先端の形、花容、花のつき形、花色、花茎、葉、根茎、
桜草園芸品種の現状

現存約300品種の中に、江戸時代から生き続けているものが100品種ある。
大部分は2倍体品種、3倍体が14品種、4倍体が3品種ある。
倍数体の品種はさらに増加する見込みがある。
八重咲きの品種は安定しておらず、試作中で評価はこれからである。
花色は白、桃、淡紅、紅、紫の範囲で、黄色は存在しない。
現在実生による品種改良は、今までのどの時代よりも盛んになっている。
改良の方向としては、既存の品種のレベルアップと全く新しい桜草の創造である。
植物を育てる喜び、楽しみという園芸の伝統を、絶やさずに伝えたい。

自生地の衰退と再生の方策

サクラソウ群生地は人間の営みで成り立っていた。下刈りと野焼き。里山の植物
河川改修や水の利用による水位の低下、洪水の減少による乾燥化、雑草の繁茂
群生地ではクローンによる繁殖が大きい。円盤状に増殖している。
江戸時代から生き続けた品種が、現在も旺盛な繁殖力を発揮している。
種子は乾燥すると発芽力を失ってしまう。自然に発芽できる環境の自生地が減少
水位を保つことと、下刈りや野焼きにより、生育期に日光を当てれば増殖できる。
条件の整った場所に自生地を再生する。移植と種子播き。

次回予告

第134回くらしの植物苑観察会

2010年5月22日(土)

「美術にみる夏草」

日高 薫(当館研究部 情報資料研究系)

13:30~15:30(予定)

苑内休憩所集合 申込不要 入苑無料